

コラム「社会からみる肥満症」

1. 要旨

慢性的過食により、その少年は13歳の時、体重が200ポンド(約91kg)もあった。事態を絶望視した両親は、息子がそれ以上ふとらないようにあらゆる手段を講じた冷蔵庫に鍵をかける、電気ショック療法など。32歳のとき、体重は自己最高を記録し、ほとんど家の中でのみ生活するようになった。「5歩歩くと息切れがする」と言い、街に出ればいろいろな設備が体のサイズに合わなくなっていた。パーの椅子も腰掛けたら壊れてしまった。

その2年後、この青年、シュレンジャー氏は34歳時に肥満(症)治療手術を受け、現在体重は203ポンド(約92kg)、旅行、ジェットスキーを楽しむなど人生を謳歌している。「あの手術は私が人生を取り戻す1つの方法でした」彼は過去を振り返ってこう語った。

彼の受けた手術はbariatric surgeryと呼ばれるものである。外科治療で胃を鶏卵大にまで小さくする方法により、胃に滞留できる食物の量を制限し、その結果、摂食量を制限できる。

肥満人口の増加と相まって、この手術治療をはじめめる病院が増え続けている。「3、4年前にこの手術を受けた患者の概数は25,000人、昨年は45,000人、今年は75,000人であり、年々増加の傾向にある」アメリカ肥満(症)治療手術学会のカネス・ジョーンズ医師は語る。学会員もここ3、4年で倍に増えたという。

アメリカでは肥満成人の数は現在約3,900万人といわ

れ、1991年から2000年にかけて61%増加した。BMI30以上が肥満とされ、成人全体の20%が肥満といわれる。手術の対象となるのは“病的な肥満(症)”が認められるか、BMI40以上とされる。1,300万人から1,600万人がこのカテゴリーに分類されるという。

患者数の増加に従い、病院側も設備をそろえ投資しなければならなくなった。肥満患者用の高額なベッド、車椅子を購入し、患者教育を受けた看護師、心理療法士、栄養士を採用した。アメリカの医療保険制度では、ほとんどの保険会社が肥満(症)治療手術に対して、数種類の保険適用コースをそろえているが、コースの内容は千差万別である。今日では手術の成功率は90%だが、まだ手術があまり普及していなかった1960年代のころの治療結果をもとに適用の幅を決めているところもあり、結果的に病

院側がその負担を蒙らなければならない場合もある。

医師たちの議論によると、この手術を行うには大変な費用がかさむが、肥満(症)に関連する疾患(糖尿病、高血圧、高コレステロール血症など)数を減らすことにつながるので、医療経済の点においては総体的にコスト節約になるという。

2. コメント

日本とは全く異なった状況にある米国の事情ではあるが、このような症例が日本でも皆無ではなく、肥満症の治療法として「日本ではどのように行っていくべきであるか」を考えることは大切であろう。(編集部)

大人気の肥満外科治療

〔CNNニュース、

April 28, 2002より〕